かになるよしをうらみたまふ也
〔抄〕けををきさまを宮のうらみ給ふ也
すき〳〵しきやうなれば　〔孟〕てとありがはなるやうに人の思はんとて、雨のふるに夜ふかく歸り給ふ也
軒のしづくも　〔師〕さ月のさまをおもふべし、宮の涙もそふ心也
ぬれ〳〵　〔細〕實事もなけれど夜の更ざるさきにとて出たまふなり
時鳥など　〔細〕草子ノ地也「五月雨に物おもひをれど時鳥夜深くなきていづち行らんの心にて書り〔河〕四五月交雲外ニ聞二三更後雨中聲郭公ノ詩也〔恩按〕宮の歸路の時分五月雨の時節なれば郭公などかならず鳴ぬべき折なりされど其折の事委とひてかゝんもうるさければきゝもとゞめざりしと云心歟
うち〳〵はしらで　〔抄〕源の好色心わるゆへに一段しでしくし玉ふを人しらぬ也
かくさすがなる　〔細〕心がけ給かたなくはうれしかるべきと也
〔恩按〕さすがなるとは、下にはにくき御心有ながらうはべはさすがに惡なるを、心しらぬ人は辱といふを、我御身のうさとおぼす心也○本居翁云源氏君の、親のごとく、ねんごろには有りながら、まゝの親ならねば、さすがににくき御心、又てよひのやうなる事のましるを、うくおぼす也、
人ににぬありさまこそ　〔細〕今玉かづらの有さまいたゞひもなきよし也源の實子のやうに聞えわりて、さるむつかしき方の事出來ぬれば人聞もいかゞと思給也
さるいまゝに　〔細〕源のゆかしげなく我物にすべきとい又思定めたまいざる也源の天然の御心ぐせ也
中宮などを　〔細〕秋好也〔師〕秋好などをもじち〳〵しく源のかけはなれてはあらでけさう心のあるといふ心也〔恩按〕中宮へ源のけしきばみ給ひし事蒲雲ノ巻ニ

人〻螢を取かへしたる歟かくしつゝ、されどはのかあるひかり、えんなるとのつまにもさつべく見ゆ、兵部卿のみ給ふての心也玉かづらのさま也はのかなれど、そひやかゝふし給へりつる、やうだいのをかしかりつるを、わかずおぼして、げにわのごと御心にゝみにけり

螢歌
なく聲も聞えぬ虫の思ひだに人のけつにはきゆる物かは、〔師〕世上の人を云也

螢の躰にて兵部卿の思をしり給かと也玉也
思ひゝり給ぬやと聞え給ふ、かやうの御かへし〔細〕りを、おもひまはさんもねぢけたれゞ、ときばかりをぞ

玉歌
こゝろいせでみをのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなる

玉かづらの也
玉の歌は宰相して聞え給ふなるべし
らめ、なゝどもかあくきこえなして、御身づからゝひきいり給に兵部
ければ、いとゝるかにもてなし給ふうれゝしさを、いみじくう卿の也
らみきこえたまふ、すき〳〵しきやうなれば、ゐたまひもわかさで、のきのしづく車もくるしさに、ぬれ〳〵夜ふかく出給ひぬ、時鳥などかならずうちなきけんかし、うるさければえこそきゝ

もとゝめぬゝ、〔細〕宮はよく源に似給ふと也御けゝひなどのなまめかしさは、いとよくおとゝ源
の君に似奉り給へりと、人〻もめできこえけり、〔細〕母のごとく取持よべいとめおし事也
やだちていつくろひ給ひし御けゝひを、うちくゝいそらで、哀玉心也
にかたじけおしとみないふ、姫君ゝかくさすがなる御けしきを、
わが身づからのうさぞかし、内府に也おやなどにそられ奉り、源の子分なら世の人めで實の親の本なるにてのこゝろ也源に思はればと也
きたるさまにて、かやうなる御心ばへならましかば、な
どいとにげなくもあらまし、人おにぬ有樣こそ、つひに世がた
りにやあらんと、おきふしおぼしなやむ、源の御心にも也さるゝまゝにゆかし
げなきさまゝは、もてあしゝてじと、源氏也おとゝいおぼしけり、恩按猶
草子地より云也
さる御心ぐせなれば、中宮おぼも、いとうるゝしくやゝ思ひ聞
え給へる、とにふれつゝ、たゞならぬきこえうごかしなどし給
へど、やんごとなきかたの、およびなさにわづらゝしくて、お
りたちあらゝしきこえ給ゝぬを、この君ゝ人の御さまもけちか

わり
やんごとなき方の　〔細〕中宮いけ
高き方にて玉かづらのごとくに
いえし給はざるなり
おりたちあらいし　懸想の色を見
せぬ也
五日にいむまばのおとゞ　〔花〕馬
場のおとゞは長の町花散里のま
しますかた也〔細〕東の御方の西
の對に玉かづらを給しはとに馬
場に近き故也
わづらいしきけそひ玉へる人ぞや
人の心やふり〔細〕男女のわはひ
は大事なると也〔愚案〕わづらは
しきといふ兵部卿いおしたちたる
無理わざもし給ふべき人ぞと也
いけみてろしみ　〔細〕前に此宮達
をさへ、さしいなちたる人づて
に聞え玉ふましきと也かしとの
給て、又後にてはいたくもなら
しきこえしわづらいしきけそひ
玉へる人ぞやとの給へり、さて
いけつてろしつの給とハ云り。
つやも色も　〔細〕つやとハ色の外
にわる物也、顔色をいろつやと
いふがごし

く、今めきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、をり〳〵人見
奉りつけば、源と玉との中人のわやしむべきと也うたがひおひぬべき御もてなしなど、うちまじる
わざなれど、源の用捨ある也有がたくおぼしかへしつゝ、さすがなる御中成け折〳〵はいひかたらひ給ふ
と也　五月五日也
り、五日にはうまばのおとゞに出給けるついでに、源の也玉かづらの方へわたり給へ
り、〔細〕夜中の宮の事を問給也いかにぞや、宮と夜やふかし給ひし、〔細〕さのみ近づけ參らせそと也いたくもおらしきこ
えじ、わづらとしきけそひ給へる人ぞや、人の心やぶり、もの〳〵
あやまちすまじき人ハ、かたくこそありけれなど、〔河〕活殺いけみころ
しみ、いましめおはする御さま、源のさま也つきせずわかくきよげに見え
給、つやも色もこぼるゞかりなる御ぞに、うすき御なほしたか
源の衣服也
なくかさねれるあハひも、いづこにくとゝれるきよらにかあら
ん、此世の人の染出したるとみえず、つねの色もかへぬあやめ
そめ
も、けふいめづらかに、をかしうおぼゆる、御衣の匂ひなるべし〔細〕かをりなども、思
玉かづらの心也
ふとなくハ、をかしかりぬべき御有樣かなと、姫君はおぼす、

うすき御なをし　〔師〕直衣夏は單し
也、うつくしき御ぞにかさなれ
ると也
いづこにくはゝれるきよらにか。
〔愚案〕けふの源の裝束別の事を
き色あひなれど、きる人がらに
やきよらにみゆると也
常の色もかへぬあやめも　〔哢〕文ヤ
目也、菖蒲によせていへり、
〔抄〕前の詞に、つやもいろもて
ほるゞかりなる御ぞなと源氏の
衣裳のよき事を云たつる其詞の
するとみるべし、常の色もかは
らぬ御ぞのあやめもけふは一し
はめづらかにおかしきかはりと
玉かづらの心にめで玉ふなるべ
し、しかも下の心に菖蒲をぞふ
くませて見るべき也
けふいめづらかにおかしくおはゆ
るかをり　○鈴木朗云湖月、にも
し、るもしの句、ともにわろし
思ふとのなくハ　〔愚案〕源氏を玉
の親と云名の思ふ所なるハと也
下に好色のこゝろわり
みる程こそ　〔細〕草子地なり其折

兵部卿より玉へ也
宮より御ふみあり、〔細〕あやめの根に便有　さろきうすやうえて、御手ハいとよしあり
てかきなし給へり、みる程こそをかしかりけれ、まねびいづれ
ゞとなるとなしや
螢歌
けふさへやひく人もなきみがくれふおふるあやめのねのみ水隱也身と云をかねたり涙なが
る〳〵に云かけたる歌
ながれん、〔ためし御文なるべし
〔細〕源のいさめ玉ふ也
けふの御かへり　あどそゝのかし置て出給ぬ、〔細〕人〳〵申也
ほときこゆれば、玉の也〔細〕自返事をし給ふ也御心にもいかゞおぼしけん
玉
あらとれていとゞあさくもみゆるかなあやめもわかずなが
かづらの手跡也〔孟〕よくもおはせぬ也螢兵部卿の好色の心に也〔細〕玉
いますこしゆゑづけたらゞと、宮ハこのましき御心に、いさ〳〵か
草子地也
あかぬと〳〵み給ひけんかしくす玉などえならぬさまにて、玉かづ所〻
ら〔奉給也〕〔細〕氣樂に居給し事也
よりおほかり、おぼしたづみつる、年比の名殘なき御有樣にて、
心おちつき給ふ也
心ゆるび給ともおほかるに、おなじくハひとのきずつくばかり

の興ある事も後にかたればさもなき色のわるなり、是も世上の教をかけり

けふさへやひく人もなき　〔師〕けふはわやめをもてはやす日也、されど水隠しわやめいけふさへ引人なくねのみなかれて、空やわらんと云也、言兵部卿の思はなぐさむる人もなき身なれば人しれずねをのみなく心也

ためしにも　〔花〕みかくれて生るるさつきのわやめ草ながきためしに人い引なん（貫之）〔細〕一段とながき根なるべし

わらはれて　〔細〕わやめもわかずとは、無二分別一にと也、かくの玉ふはかへりてわさく見ゆるよし也花鳥にくはし〔孟〕いまだわやめをひかぬ程はいかはどなながきもしらざりしが、引いづれば淺事しらるゝと也〔花〕此わやめもわかずは古今のわやめもしらぬ戀もする哉のわやめとおなじ何の分別もなき心也、下の根の一字にて、菖蒲とはきこえたり（下略）

のとなくても、やみにしがあと、〔孟〕草子地也いあぐおぼさゝらん、源氏也殿乞東の御かたにもさしのぞき給ひて、中將のけふのつこのさの手つが源詞也夕霧也ひのついでに、をのこども引つれて、物すべきさまにいひしを、〔細〕用意し給へと也さる心し給へ、まだわかき程にきあん物ぞ、あやまく爰には、わざとならずしのぶるとをも、此親子達このみこたちのきゝつけて、とぶらひものし給へば、おのづからと〳〵しくなんあるを、ようい乞給へなど聞え給ふ、うまゞのおとゞいこなたの廊よりみとは〔細〕花ちる里の住給ふ方也源の宣ふ也すはゞ遠からぬ、わかき人〳〵、わたどの〳〵戸わけてものみよや、左のつかさにいとよしある官人おはかるころなり、せう〳〵〔孟〕殿上人におとらぬ容儀共と也の殿上人みかとるまじとの給へば、花ちるの方の女房の心也物みんとをいとをかしとれ〔細〕玉かづら也もへり、たいの御方よりも、わらへべなど物みにわたりきて、ちらの戸ぐちに、みすあをやかにかけわたして、いまめきたるすそごの御木帳共たてわたし、わらへしもづかへなどさまよふ、

わか〳〵しくと　〔孟〕文ノ詞なり〔哢〕宮をわか〳〵しうと歟〔愚案〕宮の御心のわか〳〵しきと云心也

くすだまなど　〔河〕藥玉續命縷（クスダマ）絲などいへり、菖蒲玉の躰也〔師〕わやめの根を、花などかざりて色〳〵の糸につけてかけ侍る也

おなじくは人のきずつくばかり　〔細〕源の心かけ給ふと也〔孟〕玉の御心に源の心をかけ玉はできずつかでもとおぼさぬ事いわらしと也

けふのつかさの　〔細〕夕霧は左近なり、人〳〵引つれてまいるべきと也〔花〕手結（デツガヒ）は左近の眞手結也五月五日にわたれり、夕霧ノ中將左近なる故に、をのことも引つれてまいらんずるよし申給ふ也〔哢〕一禪〕手結は騎射の時二人つゝつがひてゐること歟、但未レ勘レ之、ついでとは内裏にての次に六條院へまいらんと也

あやしくてゝには　〔細〕かりそめさうぶがさねのわこめ、〔河〕二藍ふたわゐのうすもの〳〵かざみきたるわらへべぞ、玉かづら也西のたいのあめる、是も玉かづらの方の人〳〵也〔弄〕ヨメリこのましくなれたるかぎり四人、をもづかへいあふちのすそごのも、なでしこの若葉の色したる〔弄〕裳をきたる時に着するを唐衣と云〔細〕花ちるさと也〔花鳥〕こきうちきをからきぬ、けふのよそひ共なり、こなたのわこきひとかさねたる衣也〔花〕色上にしるせりへかさねに、おでしこがさねのかざみあぐ、おはどかにて、イニ入めやすきわらいべをの〳〵おの〳〵いみがはなるもてなしみ所あり、わかやかなる殿上人などは、めをたてつゝけしきばむ、ひつじの時ばかりに、馬場源の也のおとゝに出給て、げにみこたちおわしつどひたり、てつがひの、おほやけごとわはさまかとりて、近衛の中少將を云也すけたちかきつれ參りて、さまとにいまめかしく、あらそひ〳〵あそびくらしたまふ、女わなにのわやしらねともと也めもをらぬとなれど、舍人（とねり）どもさへえんなるさうぞくをつくして、身をなげたる、てまどわしなどをみるぞをかしかりける、南の町もとはしてとる〳〵とあれば、あなたにもかやうのわかき

にし給事も六條院にある事ゝは人〳〵きそひ給と也〔孟〕そとした
る事もこと〳〵しくなると也
左のつかさにいとよしある官人
〔孟〕夕霧は左中將也官人は將監
將曹府生を云、隨身共ニ可レ然
書ある也
せう〳〵の殿上人に　○鈴木則云
せう〳〵は少〳〵か、なま〳〵と
いふが如くなるべし、又はなま
なまを生〳〵と書たるを、假名に
かくうつしひがめたるか
すそでの御木帳　〔哱〕ゝへはしろ
くて、かたびらのすそゝ紺にて
も紫にてもこく染たる心也、今
の世にも車の下すだれなどは如
此
蒼浦がさね　〔花〕表青くうら濃紅
梅也〔河〕面青裏白色也
あふちのすそでの裝　〔花〕あふち
はおもてうすいろ、うら青也す
そではうへしろくすそを紫にそ
めたるなるべし
けふのよそひもなり　〔愚案〕あ
やめがさねあふちのすそでなど

人共にみけり、たぎうらく、なそりイらくそんなど、あそびて、かちま
けのらんざうどもの〳〵云るも、よに入たて〳〵、何事もみえぞ成
〔孟亂聲也〕
たてぬ、とねりどもの錄ろなく〳〵給ひる、いたくふけて、人〳〵
〔近衛舍人也〕
みあわがれ給ひぬ、〔源氏也〕かといひ、〔花ちるの方に也〕こなたに御とのごもりぬ、物が
たりなどきこえ給ひて、〔細〕源の詞也兵部卿のみやの、〔細〕人にすぐれたると也人よりひこよなくも
のし給ふかな、かたちなど、いすよぐれねど、よういの氣色など、
いとよしありあいぎやうづきたる君也、〔花散に御覽ありつるかと也〕忍びてみ給ひつや、よ
イ人いよしといへど、〔花ちる詞也〕猶こそあれとの給ふ御おとうとにこそものし給へ
ど、ねびまさりてぞ見えたまひける、年比かくをり過さず、わ
たりむつびきこえたまふと聞とべれど、〔侍つれどイ〕むかしのうちわたりに
てはのみ奉りし後、おぼつかなしかし、いとよくこそかたちな
どねびまさり給ひぬれ、〔帥の宮也〕そちのみこよくものし給ふめれど、
兵部卿よりおとりたると也
けとひれとりて、おほ君の氣色にぞものし給ひけるとの給へば、

すへて五月五日の裝束なり
なでしこのわか葉の色　〔河〕濃萌
木〔花〕なでしこはおもてすわう
うら青し、花にかたとる色也若
葉の色とは葉にかたどれる色な
ればうすもえぎ也
げにみこたち　〔師〕源氏のおぼし
しでとくと也、まへにわざとな
らず、忍ふる事をも、此みこた
ちのきゝつけてとぶらひものし
玉へばとあり
おはやけごとには　〔細〕一義は大
やけごとにはかだむ樣なる事の
あるを、さもなきと也、一義に
は中將もましはりたるをいへり
花鳥兩說あり、何れも可レ然
〔花季〕〔哱〕〔一經〕左右の騎射は
公事なり、中少將は不レ射レ之
六條院にては羽林ともものいるを
いふ也〔師〕大將は近衛づかさの
かみ也、中少將はすけなり
とねり共さへ　〔孟〕とねりは近衛
也〔花〕是は競馬の事をいふ也、
馬場の手結は騎射とて馬に乘て
的を射る事でかり有レ之、競馬

源心也花散のふとみて人〳〵のさまを能しり給ふと也
ふとみまとり給ひにけりとおぼせど、はゝゝ名みて、なはあるをゝ
よしともあし共かけ給へぞ、源の事を草子の地より云也人のうへをなんつけ、おとしめざ
まのことといふ人をば、いとはしき物又し給へゝ、源の心に思ひ給ふ也右大將などを
だに、心にくき人にすめるを、おにゝかりかへある、ちかきよす
がにてみんと、あかぬとにやあらんとみ給へど、とにわらへし
てゝの給へず、今へたゞおほかたの御むつびゝて、別〳〵におはとのおましなど
でもる也
もとことにておほとのごもる、などてかくとなれそめしぞと、
源殿へくるしがり給ふ、大このたなにやかやとも、〔哱〕恨などもし給へぬ也そばみ聞え給と
で、年比かくをりふしにつけたる御あそびどもを、人ごてにの馬場がわ
みきゝ給けるに、けふめづらしかりつるとばかりをぞ、このま
ればこそかやうの事をみれと也
ちの覺え、きら〳〵しとおぼしたる
花ちる歌
「そのこまもすさめぬ草と名にたてる汀のあやめけふや
ひきつる、とおほどかに聞え給ふ、なにゝかりのとにもあらね

の事はなきを、五月五日ノ節會（セチエ）武德殿にてをこなはるゝには、騎射の事はてゝ、五位以上の人の奉れる馬に乘て競馬あり今案騎射と競馬とに、近衛ノ裝束不レ同、競馬には打懸といふ物を着す陵王の裝束のごとし、騎射にはたゞ褐衣を着する也、とれり共さへえんなりとは競馬の裝束のゑ也、高藤元年九月十九日、關白の賀陽院にて駒くらべあり、行幸行啓あり、東ノ對を馬場のおとゞにして其前北南に御馬をはせたり云〳〵、此例相似たり（中略）

身をなけたるてまをはしなを

（河）身を捨て勝負したる歟、弓を射る形也（細）あらそひきはふなり

南の町もとをして　（花）馬場をば北より南へとをしたれば、紫上のおはします南の町の東對にも其かたの若人共はみ侍る也

たぎうらくらくそん　（孟本）打毬（ダギウ）樂（ラクラクソン）（河海）納蘇利云〳〵（花）六落鼓（ナソリ）

ど、源氏心也哀とれば、したり

源歌

にはどりにかげをあらぶる（花）草子地也わかこまいつかあやめにひきわかるべき、あいたちなき御とゞもなりや、朝夕のへだてわ（源詞也）たぶれるやうなれど、こゝろやすくこそあれと、たゞ事をの給へども也ぶれごとなれど、のどやかおいする人ざまなれば、寔に宣ひなす也（細）花ちるさと也床

て聞え給ふ、ゆかをばゆづり聞え給て、御木帳引へゞておほとのごもる、けぢかくなどあらんすちをば、いとにげなかるべきとわ、花ちるの源へ夫婦のかたらひなどいと也はなれはてィれもひとなれきこえ給べければ、源氏もしゐていの給あながちにもいぬ也（細）五月雨也（孟）例年より日數へてふる也きこえ給ハず、ながの雨例の年よりもいたくして、えるゝかたなくつれ〳〵なれば、御かた〳〵（箋）給ある物語也　其時分のはやり事也給物語などのすさびにて、あかしくらし給ふ、給など書事也あかしの御かたと、さやうのことをもよしあり

玉かづら也（孟）給

たなし給ひて、姫君の御かたに奉り給ふ、西のたいには、ましまし明石姫君に也

物語

給物語

てめづらしく思ひ給ふ也

給

ちえく覺え給ことのすぢなれば、明暮かきよみいとおみ

日武德殿の騎射はてゝ、唐人の裝束にて馬にのりて毬子をはしらしむるを打毬と云、其時奏する樂を打毬樂と云也、納蘇利も六日の競馬の日雅樂寮是を奏す（師）打毬樂（大食調）落蹲（高麗曲納蘇利ノ一名ナリ）

らんざう　（河）舞勝負の後乱聲常の事也、競馬・相撲、闘雞などにもあり（細）勝方乱聲には必大鼓など打事也、今も賀茂の競馬にも此面影はある也（孟）勝たる時鐘をつく事也、樂のおさまる時の聲也（師）らんとやうともらざうとも讀なり

よしといへど　（細）形のよき人はあれど是はどの人はなきと也（愚按）人はよしといへどゝは、兵部卿を人はほめれどもなをいまだとにや

御おとうとにこそ物し　（細）源よりは弟にてましませども、源は若くゑえ給也（孟）宮は源の弟にてましませと源よりふけて見えたると花散里の宣ふ也

年比かくおり過さず　兵部卿は六條院へ切〳〵渡り玉ふとはきけどもと也

昔のうち渡りにて　（細）花散里の詞也久しく見まいらせ給はざりしと也（師）花散は姉女御につきて禁中におはせし故兵部卿を折〳〵みたまひしと也

そちのみこ　（細）兵部卿ノ宮の弟也、花ちる里此つゐでに帥の宮のことをいひ出玉ふ也

おは君のけしき　（細）孫王めくとなり（師）同（師）花ちるさとの詞也王の字をおはきみとよむ也花散の心すぐなるによりかくかざらずのたまふなるべし

ふと見しり　（細）花散里はよく見しり給たるよと思給て源の返答にも及ばざる也

なをあるをばよしともわしとも　（師）源氏の御さま也花ちるさとの批判の外の人をは毒惡をのたまはぬ心也

人のうへをなんつけ　（細）かやうの所心をつくべし（師）源氏の性の大やうにまします也

右大將など　（細）髮黑也、今螢の宮の事を云出給も、玉かづらの事をとやかくやと思ひ玉ふ故也

ちかきよすがにてみんは　（細）源のむこにてみんと（花）髮黑を玉にわはせ侍っば不足に思ふ事もわらんと也

今はたゞ大かた　（細）花散里と源とのわはひなり、いもせのかたらひは今はなきよし也

なをてかくはなれ　（細）はの字兩說、一義は詞の字也、又は離也（師）今花散とうと〳〵しくなり玉へるをの玉ふ也

けふめづらしかりつる　（細）ことなる御遊なとはこなたにてはなきを、今日は夏の御方の得分にて此事の有しと也

そのこまも　（河）神樂其駒「その駒ぞやわれに草かふ云〳〵（花）後撰「香を留てかる人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりける」（愚按）今案すさめは不レ受也（細）菖蒲をゞ馬食せざる也花散里のはへなきにたとふ、されとけふの遊はてなたの刑の折にわひたるとなぐさみたると也（師）競馬の折なれば其駒とよみ玉へり

には馬に　（略）鳥は蛮詞なり（師）影を双ぶる鳥なれば枕詞にをける也わか駒は若でも也蔫（ヒ）と菖蒲とに對して影をならぶ

るとはいへり、引わかるべきとは花散里と源氏の御中とのことをたはぶれの給也、花鳥の説はにくげわる也不レ用レ之〔花〕わかこまは駒くらべの日なれば駒と詞をかれり〔河〕「わかこまとけふにわひつるあやめ草おひおくるゝやまくるなるらんわかこまはわかきこゝ也〔孟〕鴛鴦はかげをならぶるといはんため也鴛と菅蒲と一所にある物なれば引わかれまいとの返歌也〔師〕鴛はまこも也○本居翁云には鳥は水鳥にて、菅蒲の生たるわたりにすめるを、駒も、影の其水に、うつりて、鴛鳥とならぶ故に、あやめにうとからざるよし也、さてかげも引も、駒の緣の詞也かくてかげをならぶるといひ、いつか引わかるべきといへるなど、源氏君と花散里との契、かはるまじき意をこめたり、注みなたがへり、

わいたちなき〔細〕花ちるさとはわが恋を云出し、源も夫婦の間の事はかりの給へり、いつれもかたす、つきなからぬわか人わまたあり、作物語にいへる人の樣なるべし

あるひとのうへなどを、〔孟〕給にさま〳〵眞偽ある事を云にやまことにや偽にや、いひあつめたる中にも、玉かづらの心也わゞ有樣のやうあるとなかりけりとみ給ふ、〔河〕住吉物語の事也すみよしの姫君の、さしあたりけんをりゝ、さるものにて、いまの世のおぼえもなほこゝろとなめるふ、住吉物語ニある事也かぞへのかみゝ、はぐ〳〵つくしにて大夫の監が事〔細〕おどろのかぞへのかみゝ、はぐ〳〵しかりけんなどぞ、かのげんがゆゝしさをねぼしなぞらへ給、源氏也〔細〕かやうの物語繪など也殿ゝこなたかなたにかゝる物どものちりつゝ、源の御目に也御目にとなれぬうるさからずィばば、わなむつかし、女こそ物うるさがりせぞ、人にあざむかれんとうまれたるものなれ、此わまたの繪物語の中に也こゝらの中にまとゝいとすくなからんを、かつゑるゝ〳〵、かゝるすゞろごとに心をうつしとかられ給ひて、わつかはしきさみざれがみの、みざるゝもゑらでかき給昔物語の繪などならでいとふよとて、わらひ給物から、又かゝる世のふるとならでゝ、げも此五月雨のつれ〳〵を何をしてか慰み給ハんと也になふをかゞぎるゝとなき つれ〳〵をおぐさめまし、是より繪さても

優ならざる歌と也〔孟〕世俗にあいたてないと云事の類也

ゆかをばゆづり聞えて〔細〕源にゆづり玉へり〔哢〕同〔花〕帳代を源氏にゆづりてわが身を木丁へだてゝ別にふし玉ふを云〔師〕常に花散の臥玉ふ所也

つきなからぬわか人〔細〕玉かづらの御方には給などかくもつきなからずする人わまた侍る也

住吉の姫君〔細〕花鳥に委みえたり〔花〕住吉の物語に中納言の女三人あり、中に一は宮腹にてみめも心もすぐれたりけるを、宮づかへさせんとせしに、まゝ母の父に讒しけれど、事たがひて後、内大臣の子宰相右兵衛ノ督なる人にわはせんとせしをも、又まゝ母はかりて、主計督とて七十ばかりなるおきなの、めただれおそろしげなるにぬすませんとする、姫君聞てにげて住吉なる所に忍て住けり、此故に住吉の姫君といふなり、彼物語にくはし略記〔哢〕さしわたりけんとは其時を思やるは尤可然姫君物語の上をいろ〳〵に源の宣ふ也是一品也

この偽どもの中に、げにさもあらんとあとれをみせ、つきぐしうつゝけたるとた、はかなきつくり物語としりながらと也とかなしごとゝとゝりながら、いたづらにこゝろうごき、らうたげなるひめ君の、もの思へるみるに、かた心つくかし、是一品也またいとあるまじきとかおとみる〳〵、こと〳〵おぼしく書なす也ろ〳〵ゑくとりあしけるゞ、めおどろきて、ゑづかふ又聞たびぞにくけれど、ふとをかしきふし、いちしるくみゆる心也あらゝなるなどもあるべし、明石姫君也このごろをさなき人の女ばうなどに、物語を也時〻よまするをたちきけば、ものよくいふものゝ世ふあべきかな、ゑらとをよくゑなれたるくちつきよりぞ、いひ出すらんとおぼゆれど、さしもあらじやとの給へば、〔細〕此以下玉かづらの詞げにいつとりなれたる人や、さま〳〵にさもくみ侍らん、たゞいとまとのとこそ思ひ給へふれけれとて、玉のまめだちて給をさし置給ふ也 源詞也無レ骨硯をおしやり給へば、こちなくもきこえおとしてげる哉、神代より世にあるとを、ゑるしおきけるなゝり、日本記などゝたゝ

のさまとみえたり、今の世に思ふもと也〔細〕同
かぞへのかみがはと〜しかりけん　○木居翁云すべてほと〜といふは、あやふき意にて、俗言に、すでにあぶなき事にて有しといふと也、されど住吉ノ姫君ほと〜士計ノ頭に娶られんとせしよし也、
あたむつかし　〔愚案〕源玉かづらの方におはしての玉ふ詞也
女こそ物うるさがりせず　三光院御説云〻女の物にわかず敷奇たる心歟云〻〔愚按〕此絵の中にまことはすくなきをしる〜かやうにすきてもてあそぶはすべて女は人にたばかられ〻姓に生つきたるものとの玉ふ也
かゝるすゞろごに　〔師〕絵には空言ありとしりつゝ心をうつしてたばかられ〻と也
五月雨がみの　〔細〕髪と云り「子規をちかへりなけうなひでがうちたれがみの五月雨のころ〔花〕五月雨の中に女君の髪を打乱して絵をみ玉ふを云也

かたそばぞかし、絵物語を云也これらにこそみち〜しくくたしきとゝわらめとてわらひ給、その人のうへとて、ありのまゝにいひ出るとこそおけれ、〔細〕慰めての給也よきもあしきも世にふる人の有様の、みるにもあかず、聞にもあまるとを、後の世にもいひつたへさせまほしきふしぐ〜を、心にこめがたくて、いひおきたじめたるなり、よきさまにいふとてゝ、よきとの限をえり出、人にえたがゝんとてゝ、またあしきさまのめづらしきとをとりあつめたる、みなかたぐ〜につけたる、みな世に有事也と云心也此世の外のことならぬかし、人のみかどのざえつくりやうかたれる、おなじやまとの國のことなれば、〔花〕なれど〻あり昔今のにかたるべし、ふかきとあさきとのけぢめこそあらめ、ひたぶるにそらごと〻いひたてんも、とのゝ心たがひてなんありける、今不用佛のいとうるゝしき心にて、ときおき給へる御法も、方便といふとありて、さとりなき物ゝ、こ〜かしこたがふ疑を置つべ

又かゝる世のふるごとならでは
〔細〕かやうのごとならでは何事にて慰玉ふべきぞと也〔愚按〕上のやうに源のの玉ひながら又道理をつけての玉ふ也
いたづらに心うごき　〔細〕古今の序ニ絵に書る女を見ていたづらに心をうごかすがごとしと云り
〔孟〕同
らうたげなる　〔細〕古き物語にかやうの車あまた侍り、姫君の心つく事もやといさむる心也、かた心とはさやうなる方の心つくかし也〔呼〕同〔花〕住吉の姫君の事也〔師〕方心つくかしとはさやうの物をみれば其方の心つくと也
またいとあるまじき　〔孟〕あるまい事と思へども人のありつへかしういへばさもと思ふと也
しづかに又きく度ぞ　〔細〕二度ともよめは筋なきを、思ひとく事も先打見るには興ある事と思ふ事のある也
物よく云もの、世にあるべきかな　〔細〕かやうの物語などは筋なくなん、方等経の中におはかれど、いひもてゆけば、ひとつむねにあたりて、菩提と煩悩とのへだ〜りなん、この人のよきあしきばかりのとゝかたりける、よくいへばすべてなにごともあしからずなりぬやと物語をいとわざとのとよの給ひなも、むなしからずなりぬやと物語をいとわざとのとよの給ひなしつ、さてかゝるふるとのなかに、〔細〕源の自稱也まろ、かやうにじはふなるえれもの〜物語ゝありや、いみじうけどほき物の姫君も、〔呼〕何の姫君の事共なし玉かづらをさしての給ふ御こゝろのやうにつれなく、源の宣ふ事を玉の聞かぬ顔なるを云歟そらおぼめきしたるゝ世にあらじな、いざたぐひおき物語にして、世につたへさせんとさしよりてきこえ給へバ、かほをひき入て、さらぎともかくめづらかなるとゝ、世語にこそゝ成侍ぬべかめれとの給へば、源詞也めづらかにやれぼえ給ふ、げまこそまたなき心ちすれとてよりゐ給へるさまいとあざれたり
源歌
思ひわまり昔の跡をたづぬれどおやにそむける子ぞたぐひ

き事とのみ宣ふ也(愚案)物語の作者辨舌よきまゝにそらごとをまことしく云なしつげたる物とみゆる也
さしもわらしやとの玉へば (愚案)源はかやうの物語はみなそらごとゝ覺ゆるがさもあるましきかと玉かづらにの玉ふ也
さもくみ侍らん (細)源なども僞をしなれたる人ぞ、さて吾御心ならひにさしくみて推量し給と也(花)源にあたりて宣ふ
詞也(師)源氏は玉を子分といつはりて、下に懸想の心あるを、玉のうらめしと思ふ故かくの玉ふ也
てちなくも (細)皆實事なるものを無背(アコツ)に申おとしてわりけるよと也、源の輕慢(キヤウマン)しての給也(孟)まことにと源の詞也
神代より世にある事を (弄)哢(ロウ)して宣也(師)給物語を源のそしり玉ふを玉かづらの不與(ノヘマフ)なりしかばかへりてはめての玉ふ
也此物語どもは神代よりしるしをきし事なる物をとの玉ふ也
日本記などはたゞかたそばぞかし (花)日本紀卅卷始自二神代一至二持統天皇ノ御宇一(メヨ)、一品舍人親王安麿等撰レ之、今
案神代より世にある事をしるしをけるは、日本紀の事也、これにこそとは惣しての物語をの玉ふ也、唐國の書には上
もなき日本紀を押さげて、それは大概をこそしるしたれ、誠に假名草子などにこそまことしく道〻しき事はありけれとて
しばらく女君の心にしたがひ玉へる也
その人のうへとて (花)是よりは、源氏君の世間の道理をの玉ふ也(細)源の詞也、下には紫式部此物語を作れる大意をあ
げていへり、莊子(サウシ)の寓言(グウゲン)のごとし、寓言といふは以二己ヲ之言一借二他人之名一(ナ)以言也(ナイフ)と註せり(孟)紫式部は莊子を以
て源氏一部は書也其樣此詞にあらはれたり(師)凡作物語は其人の事とて名を題してはかゝねども、世ノ人のありさまの
善惡の、見てもきゝてもさしをかれぬ事の、後世に殘して人の教にもしたき故かきをきたる物ぞと也
よきさまにいふとては (細)されば人をはめていはんとてはさま〻にとりつけていへる也、されど世間になき事をば一
もいはざる也(孟)よき事をばよきやうにかき、そしる事をぞそしる也
人にしたがはんとては又わしきさまの (哢)紫式部が作意を心にこめて寓(ユヒ)て述る也(師)人にしたがはんとてとは人の善惡
のさま〻にしたがひては、又世にめづらしくわしきさまの事をも書と也、是も源氏紫の上などの事は、殊外にはめな
し、末摘花江ノ君などの事、おかしくわしきやうに書しを下に持て云也
人のみかどのざえつくりやうかはれる (細)ざえは才也(花)人のみかどの才とは唐朝の書籍を云、才ある人の作れる書也
(愚案)唐の書籍も文躰つくりやう其時代〻にてかはれると也(哢)さへにて、詞たるべき歟愚案(省柏也)祇同云〻、(愚
案)此說も同儀也
おなじやまとの國の事なれば (細)(孟)(師)本 如此(細)文躰古今にかはれる事も異朝本朝の作意又其内にて淺深こそあ
るべけれ、一向になきにてはあるまじきと爰にて給物語を助ての玉ふ也、(愚案)是先に日本紀の事をいへるにつけて、

今の給物語とを引わはせての論
なるべし、むかしの日本紀、今
の給物語、其文躰は古今のかは
りあるべし、其作意の淺深こそ
あらめ、おなじ日本の事なれば
いづれも後代のためにしるし
をく事にて、そらごとゝは云べ
からずとの事也
佛のいとうるはしき御心にてとき
をき玉へる御法も (細)此段安く
聞えたり、されど教に合せて見
る也 (愚按)如來の衆生濟渡(サイト)の大
慈悲を貴(タツト)みはめて、うるはしき
御心といへり、御法とは、五時
「花嚴は別圓二教(三七日)阿含(アゴン)
は但三藏(十二年)、方等(ハウダウ)は通(ツウ)
別圓の四教俱說(ケウグセツ)(十六年)、般若
は通別圓(十四年)、法華は圓頓(ベンヂヤン)
一乘之經也(八年)
方便といふ事ありて 方便はてた
てともたばかりともよめり、衆
生の機を調へて一實に歸せしめ
んとて、さま〻のてだてをな
し玉ふをいふ也
さとりなき物はてゝかしてたがふ
なき、 源詞也
ふけうなるゝ佛の道ゐもいみじくこそいひたれとの給へ
ど、 (師)僧道(ソウダウ)も籠りたる也 玉の也
かはもたげ給へねば、 源の玉のを也
恨たまへば、 玉かづらの返歌し給ふ也
かふうじて
玉歌
ふるき跡をたつぬれとげになかりけり此世にかゝるれやの
心に、ときこえ給ふも、心とづかしければ、 源の也 いとといたくもみだれ
給へず、 是より紫の方の事也
かくしていかなるべき有樣ならん、むらさきの上も、
明石の姫君也
姫君の御あつらへにとつけて、物語へ捨がたくおぼしたり、こ
枕草子にも物語の名に出せり云〻不レ傳(サルヅタハラニ)レ世なり源詞也 (花)
まの〻物語のゐにてあるを、いとよくかきたるゐかあと
て御らんぞ、ちひさき女君の、なに心もおくて、ひるねし給へ
る所を、昔の有さまおぼし出て、 紫上也 女君とみ給ふ、 源詞也 かゝるわらへ
どもだに、いかにざれたりけり、(孟)青本けり用レ之一本けん不レ用云〻 まろこそ猶ためしにもつべく、
心のどけさへ人に似ざりけれときこえ出給へり、 草子地也 げにたぐひな
はからぬとどもへ、このみあつめ給へりけんかし、 の詞(孟)明石姫
姫君の御前

うたがひををきつべくなん、方等経の中におはかれど（花）しどらく天台宗の義によらば、法華を真実に定るに付て、爾前の諸教を皆方便といへり（愚案）紫式部は天台宗の許可を受玉へば、法華経の外の四時ごと〳〵く此法華一実相に歸せしめん方便の權教と見るべし、されど餘経にも迷ふべき事はあれども其中にも方等は、四教倶説の経なれど、いづれと決定すべきかたなくて、さとりなきものは迷ひつべし、猶亦方等には彈呵褒貶といふ事ありて、三藏教にとゞまるものを彈呵して、通別圓をはめ、通教にとゞまる物を彈呵して、別圓をはめ、別教にとゞまる物は圓をもて彈呵し圓教にも意失する物を、又彈呵せり、如レ此四教たがひに彈呵褒貶してさとりなきものは惘然としてまよひつべき事おはきゆへに、別して方等経の中におはかれどゝはいへり

いひもてゆけばひとつむねにわたりて（河）五時説教ごと〳〵く法華一実に歸する也（愚案）かの花厳阿含方等等より次第に説來りて、法華の一実に歸せしむる事なれば、其方等経の方便もいひもてゆけば終には一つ目といふ事法華経に云ゞ

諸ノ所ニ言説一皆実不レ虚　毒量品文句、九ニ云ゞ若昔施ニ七宝一遂不レ得レ入ニ一実ニ者、可レ言ニ其虚一、虚引得レ出、無レ有ニ虚出ヲ而不レ入レ実、者故知昔虚為レ実故也、皆実不レ虚、佛事無レ疲即此義矣

はだいとぼんなうとのへだゝりなん、此人のよきわしきばかりの事はかはりけるよくいへばすべてなにでともむなしからずなりぬや　菩提はさとり、煩惱はまよひ也、佛の道にもはだいとぼんなうの隔りある事、此絵物語かな草紙などにいへる、よきひとわしき人のありさまのごとしと也、花鳥ニ云ゞよくいへばすべて何事もむなしからずとは、かゝる絵の物がたり假名草子なども是によりて録をはじこせば則方便の諸教と更にかはる所なかるべしと、佛の御法に引かけてとはりをのべ玉ふ也、（抄）善悪不二の理なれば、かやうの作物がたりまでも皆眞実の道理にはづれずと、物語によきさまに注を付ての玉ひなすなり、（愚案）哢花一流の御説は此段を五時にあてゝ委ク註し玉へり別に奥に註す

物語をいとわさとの　絵双帯の上を態實〳〵しき事めきていひなし玉ふと也

しはうなるしれ物　（孟）源氏詞也實法也しれ物は（細）愚擬なる也（師）玉かづらをわが物ともせぬ事をの玉ふなるべし

いざたゞひなき物語にして　（師）源の實法なると玉かづらのつれなきと、世にたゞひなき物語にして後代にのこさんと也

さらずともかくめづらかなる（細）玉かづらの詞なり（孟）書とゞめずとも、かやうの事は世語にならんとの玉ふ也

めづらかにやおぼえ玉ふ　（細）源の詞、我をば世にためしなきと宣ふとはりなれど、又玉かづらのごとくにつれなき人は世に稀なると也

思ひわまり　（細）源の歌也玉かづらを實の子にしてのたまへる（師）むかしもかやうの事ありやとたつねられと也

ふけうなるは　（細）花鳥にみえたり（河）不孝（花）花厳経十二ニ云

地神常ニ言ゞ我負ニ大地一切所レ有及須彌山不ニ以為レ重一亦無ニ厭心一於ニ三種ノ人一厭倦ヲ不レ欲ニ任持一（略）二念レ衆ニ息親一不ニ孝父母一云云心地観経二ニ云若シ有ニ男女一背レ恩ニ不レ順令ニ其ノ父母一生中怨念ノ心上昇子即チ墮ニ在地獄餓鬼畜生一云云

ふるき跡を　（細）源のごとくなる心のあるは古物語などにもまさになきと也

かくして　（細）草子地也何と行末はあるべき事ぞと也（師）玉かづらの身の行すゑを、物語の作者のいへる也

むかしの有さま　（細）紫上の昔の事を思出給也（花）むらさきの上は此物語をみ給ふて昔のわが身のありさま思出し給ふ也

わらはとちだにいかにざれたりけり　（花）これも物語の中にあるべき君也にて、此世なれたる物語など、およみきかせ給ふろ、みそか心つきたる物のむすめなどは、をかしとにはあらねど、かゝるとよにいわりけりと、みなれ給とんぞゆ〳〵しきやとの給ふも、こ（明石姫君へのいましめの心持の也玉かづら也　草子地也）よなしとたいの御かた聞給とゞ、心おき給つべくなん、（紫詞也絵の事をいふ也）うへ心あさげなる（抄）昔物語に同やうの事あるをの給ふ也ひとまねどもゝ、みるにもかたとらいたくこそ、うつぼのふぢゝらのきみのむすめこそ、いとおもりかにむかゝ（異名也藤氏ならず云〻）ゝき人にて、あやまちなかめれど、すくよかにいひ出たる、しわざも、女ゝき所なかめるぞ、（偏なる心也）ひとやうなめるとの給へば、うつゝの人もさぞあるべかめる、ひと（句）〳〵しくたてたるれもむさとにて、よきはどにかまへぬや、よしなからぬおやの心とゞめて、おふしたてたる人のこめかしきを、いけるゝるしにて、おくれたるとおほかるゝ、なにわざをしてかしづきしぞと、親のゝわざへ、思ひやらるゝこそいとはしけれ、げにさいへ

し、〔師〕おさなきも、いかに見給ふや、されば侍りと紫上に申給詞也

まろこそ猶ためしに　〔細〕紫上を

は隨分能袋たてたると自稱し給也〔愚案〕これは源の好色なきとぎれて自稱し給ふ也

げにたぐひおはからぬを　〔哢〕好

みわつめたる歟〔細〕草子地也

〔愚案〕源のためしにしつべくとの玉へるをうけてげにたぐひおはからぬといへり、好色のかたには隨分めづらかなる事を好わつめ給ふへりしと云也

みそか心つきたるものゝ　〔花〕人

にかくしたる振舞也〔師〕むかし物語共にいへる姫君の事也、みそか心は、ひそかにわろきふるまひする事也

おかしとにはわらねど　〔師〕源の

用捨おもしろし、此物語の趣を見てよき事とはおぼさずともかやうのざれたる事も世にある習とおぼさんもうるさきと也

たいの御方　〔細〕玉かづらの聞給はゞ、誠の御むすめにはかやうど、其人のけいひよと見えたるいかひわり、おもだ〳〵しかし、めのとや媒などの其人を婚事をいふ歟言葉かぎりまばゆくはめおきたるに、えいでたるわざ、いひ出たるとの中に、げにとみえきこゆるとなきいとみれとりするわざ也、すべてよからぬ人に、いかで人はめさせじなど、たしのたまふ、まゝはゝのむらきたおき、昔物語もおはかるを、

草子地より云明石の姫君也〔河〕世俗に点さすと云事也

だこの姫君のてんつかれ給ふまじくと、よろづに覺

源の用意也

心みえゐ心づきおしとれぼせば、いみじくえりつゝなん、かき

〔細〕夕霧也

と〳〵のへさせ、給おどゝもかゝせ給ける、中將のきみを、こな

たにはけどはくもてなし聞給えへれど、姫君の御かたには、さ

明石の姫君い兄弟なれば也

源心也

しとなちきこえ給ハず、ならはし給、わが世の程ハ、とてもかくてもおなじごとなれど、なからんよを思ひやるに、猶みつき、

〔細〕紫上の御方也

思ひたみぬることゝもこそ、とりわきてハおぼゆべけれとて、

夕を也

〔細〕姫君の御方の南面也

みなみおもてのみすのうちハゆるし給へり、ざいもん所の

の心づかひのわりけるよと思ひ給べきと也〔孟〕玉には云そやして、真實の娘にはかやうの事をも制し玉ふはかはりたると云儀也

うつぼの藤原の君　〔細〕花鳥にみえたり、わまたの人〳〵にもなびかで内に參りし人也、これもあまりなるとの給也〔花〕うつぼ物語に藤原の君とて一世の源氏にて、右大將まさよりと云人の子の九にあたりてわて宮と中、みめ心すぐれ給へりければ、時の有職聞つたえて心をつくすに、心づよくて春宮へまいりぬれど、かの心つくしたる人〳〵わるは出家し父死家をやきなどしらみけれどきゝいれざりしをおもりかにてはかゝくしき人にてわやまりなしといへり云〳〵取レ畧記レ之

すくよかにいひ出たるしわざも　〔細〕よめる歌もすくよか也〔花〕いづれにもかさけなくもてなして隙なきもの文どもゝ返

しし給はず源宰相にたまさかに返しし給ふとても「苦おふる岩に千世ふる命をは黄なゝ泉のみづぞしるらん「しぬとい

はゞたゆしにもせん物をのみおもふ命は君がまに〳〵よめる歌此躰のみ也〔孟〕

うつゝの人も　〔細〕今現在の人もかくわる也わまりに思ふところをたてたる人をいへり〔哢〕現存の人をいふ也

ひと〳〵しく　○鈴木則云心得がたし、おもふに人〳〵おのがしゝとわりしを、おのがをおとし、しゝをしくに誤れるなら

ん、たてたるおもむきとなりとは、上の心わさげなる人まれどもと、おもりかにはか〳〵しき人とをうけていへり、

よきはどにかまへぬやわしからんとふくめたる詞也　〔細〕此やのにてよみ切べし、たゞ能はどにすべきゝなり中庸をたつるわりかたしと也〔愚〕よき

はどにかまへぬやわしからんとふくめたる詞也

よしなからぬ親の　〔細〕至極やしなひたてたるとて只大やうなるばかりにて何事にもをくれたるは曲もなきゝ也〔孟〕養育

し大やうなるばかりをしるしにて何の能もなくてあるは、何わざをして親のかしづきたるぞと親まで思ひやりみさげら

るゝと也

いけるしるしにて　○鈴木則云一本に、詞いつけるしるしと、わるをよしとすべし、又此上にて句きるわろし、人のにてき

るべし

なにわざをしてかしづきしぞと　○鈴木則云藝道の事なり、

けにさいへど　〔細〕よくそだてたる人はさすがなる所の見ゆると也、人をそだつべき樣を紫上にいひきかせ給也〔師〕右の

やうなるはおやまで見くたすとはいへど又其人よきは親までおもだゝしきといへるにや

ことばの限りまばゆく　〔孟〕此段殊勝兼ておさなき人の器用なるとはめをきておひたちさもなきは惡也人にしらせずして

さて何事もいづるとのよきは本意也おぢめのとなどの何もしらして譽をく事わりわろき事也〔細〕花鳥に物語の作り樣

とあり如何こゝは只世上のありさまを云也

すべてよからぬ人に　〔細〕無三使レ名過一レ實と崔子玉座右銘にもいへり奇特なる語也無分別なる人のはめそこなふ事の有

也

まゝはゝのはらぎたなき〔細〕はぎたなきとは心の惡きを云也まゝ子をにくむ心のわる也さやうの方をかける給物語などをゞ心見えしとてえり除き給へる也

花島の説いかゞ〔愚案〕心みえに心づきなしとはかやうのはらあしき事姫君などにみならはせしとてえりのけ給ふ也

こなたにはけどをく〔哺〕夕霧紫上の御かたにはうときなり

わが世の程はとてもかくても〔愚案〕是も姫君をおぼす故也、源のおはせし世にもむつび玉ひてこそ、親しからめとおぼして姫君にならし玉ふ也

おり〳〵にうちしはたれ〔師〕夕霧雲井ノ鴈の事故思ふゆへなり

たのみかくべくもしなさず女のかたより夕霧に頼かくるやうにはしなされぬと也

なをかのみどりの袖を六位すくせといはれし恥をすゝがんとのみ思ひ給ふ也

あながちになど〔細〕今ちとしる

女房の中いゆるし給はず、源の御子すくなければと也あまたおはせぬ御なこのらひにて、いとやむごとなくかしづき聞え給へり、〔細〕夕霧をほめたる也夕を也おほかたの心もちひなぶも、いと物ゝしく、まめやかにものし給ふ君なれば、源のうも夕心也明石の姫君のいはけなき也ろやすく覺しゆづれり、まだいとけなき、ひゝなあそびなどのけはひのみゆれば、かの人のもろともにあそびて、〔細〕雲井鴈の事を思ひ出玉ふ也すぐし、とし月の、まづ思ひ出らるれば、姫君の雛の宮仕を夕霧のしひゝなのとのゝみや給ふ也づかへ、いとよくし給て、をり〳〵にうちしはたれ給ひけり、是より夕霧の好色の方に實〻しきを云也さも有ぬべきあたりにも、とかなしごとも、のたまひふるゝもあまたあれど、たのみかくべくもえなさず、夕霧の心に也さるかたになどかはみざらんと、心とまりぬべきをも、左禮事にしるす也えひてなはざりごとにえなして、なほかのみどりの袖を、みえおほしてえがなど、思ふこゝろのみぞ、〔弄〕こさらにたて〻雲ゐ鴈の事を思ひ給ふ也やんごとなきふしにとゞまりける、あながちになど、〔細〕例也おれたる心也〔弄〕同こゝづらひまどゝい、たふる〻かたふ、ゆるし給ひもし

で給ハゞ内大臣ゆるし給ふべきを、夕霧の心には、昇進もわりての給べきとて斟酌ある也

人にゝをはらせ〔愚案〕人とは内府をさしていふ也内府よりも夕霧に今まで雲井鴈をゆるさゞるいひわけせさせ奉るばかりにしなさんとの心也

人の上にては〔細〕夕霧の詞也雲ゐ鴈の事心にわり〔愚按〕柏木の好色にて玉かづらへ云よるをもとかしきと夕霧の云てとりわへ給はぬ也、人のうへにてはかく云て、われは雲井ノ鴈に心をしめ給ふ事草子地より云歟○鈴木則云夕霧の心中の詞也

昔の父おとゞ〔細〕致仕の大臣と源氏の御わはひ又今夕霧と柏木とのまじらひの符合したる也

そのおひ出たる〔細〕此内大臣は男子ゐまた持給へるをいへり

〔師〕内大臣の御子の中に或ハ母かたの高下又其人の器用に隨て其程〻にしたて給ふ也○鈴木則云湖月抄説よし、おぼえに何きるわろし

つべかめれど、〔花〕はしたなめられし事をつらしと思ひし也つらしと思ひしをり〳〵、いかで人にもとわらせたてまつらんと、思ひおきしとわすれがたくて、〔細〕雲ゐ鴈ばかさうじみばりには心ふかくみえ玉ふ也かりには、おろかあらぬ哀をつくしみせて、おほかたにはいこころいられせぬ也られ思へらぬ、〔細〕柏木など也せうとの君達などもなまねたしなどのみ思ふとおほかり、たいのひめぎみの御有樣を、右の中將にいとふかく玉かづら也〔細〕柏木也おもひしみて、〔細〕みる子など也いひよるたよりもいとゝかなければ、この君をたのむ也ぞかこちよりけれど、人のうへふてい、もどかしきわざありけりと、つれなくいらへてぞものし給ける、草子地也昔のち〻おとゝたちの、御おからひに〻たり、内府也内のおとゝい、御子どもとらぐいとおほかるに、そのおひいでたるおぼえ、人がらにえたがひつつ、心にまかせたるやうなる、〔孟〕昇進させいらせられたる事也覺えいきほひにて、又なくしたて給ふ、女ゐあまたもおいせぬを、女御弘徽殿也細立后の事也もかくおぼえゝことのとどこはり給ひ、〔孟〕雲ゐ鴈也姫君もかくとたがふさまにて物し給へば、いと

姫君も　〔愚案〕女御の立后の本意不レ叶故、せめて雲井鶴をおぼせしに夕霧の事あれば又事たがふやうなると云歟　行へしらず成にたると　○鈴木朗云なしにたる事とよむべし、てれをなりにとよまんには、上の人を丶人のとすべきなり　めはなつまじかりける　女子はよくまもるべき物ぞとなり

さかしらに　〔哢〕さし過なるよからぬ躰也〔愚按〕賤身におちぶれながらわれは内府の子ぞなと影にて系圖たてに云てやあらんなと玉かづらの源の方におはする事をしらて思ひ給ふ也

君たちにも　〔細〕和木なるにさしての給ふ也〔孟〕我子と名のり出るものわらば求給へと御子達にも内大臣の宣ふ也近江君を引出すべきとの書様也

中比なるは　〔細〕中比は打忘れ給し也今源の玉かづらをかしづき給へるを聞てさらに思出給ふ也

御心にもしられ給はぬ　内府の子内府心也

口をしとれば　〔細〕玉かづらの事

出給しことなれば　〔細〕夕がは上也

心にひかれて　内府思玉ふ也をんなで

すべて女子といひて　〔抄〕系圖だてに也

る、さかしらに我子といひて、あやまちさまにてもふれやすふん、とてもかくても聞え出こばと哀におぼしわたる、君達にも

内府のの給ふ也　若き時の好色の

もしさやうなる名乗する人あらば、みゝとゝめよ、心のすさび

すさみにと也　よからぬ事もありし中にと也　〔抄〕夕顔の事をの給ふ也

にまかせて、さるまじきこともおはかりし中に、是ゝいとしか、

かしなべてのきはには思ゝざりし人の、もかあき物うむじをしたる心也〔孟〕内大臣の女子のすくなき事也　〔孟〕夕顔の事也　〔花〕温也〔孟〕怨らみて、かくすくなかりける物のくさゝひひとつを、うしなひたる

草子地より云也

との口をしきとと、常にの給ひ出、中比などはさしもわらず、

うちわすれ

打忘給ひけるを、人の様〻につけて、女子かしづき給へるた

女御姫君の思やうならぬ事也

ぐひ共に、我れもはすふしもかなとぬが、いと心うくはいなく

の思ひもよらぬが有て、其人しかゝ人の物となりてあるをやがて内府のそれを聞出給事わらんと云也是玉かづらの源の子と成て藤袴の巻にて内府の對面ある事を占人の云ふなり

佛のいとうるはしき　〔細〕此段安く聞えたりされど、教にわはせて見る也、諸抄に見え侍り、如

來衆生の心を即時にひるがへすべきとて、先華厳を説給へる也〔哢〕凡如來出世の本意は、凡聖一如、善悪不二のことはりを説て、衆生のまよひを速にひるがへさんとおぼしめす心あれば、大悲のきはまり是に過たる事あるまじき故に、うるはしきといへるが、此故に國も實報花王の土を現し、佛も報身のすがた、説法も三界唯心の法なれば、佛の心も法もうるはしきすがたなるべし、花厳經の心也

方便といふ事ありて　〔細〕是則方等也、最初より大乘を説給へる事佛の本意なれと衆生の機いたらざれど、先大乘をやはらげて、權教を説給へう其中に阿含は一向に小乘也〔哢〕最初に大乘の法を説給ふ事は、佛の本意也、されども時いたらざる衆生に、不相應の法説給へば、機教相違する故に、三七日思惟の内證より、實大乘をやはらげて權教を十二年説給へう。この中に阿含經一向の小乘也、佛ゝ劣應身、所化も髪をそり衣を墨にそむる事此時よりはじまれり、誠ハさもあるべきとならね共、あまりに衆生の物ごとに勤心ふかき故に、是をやぶらんとてかやうの方便をまうけ給ひ

さとりなき物ハ　〔細〕未衆生の機縁熟せざる間、四教の大小乘をならべて説給也、此時に昔のさとりをも、今のさとりをも得ざる、人ある也、此時に狐狼野干といなるとも、二乘の見をなすべからざる山をの給ふを聞て、迦葉泣て三千にふるひ、須菩提善吉愕然として、手に一鉢を投といへり其後畢竟空の理を聞て、聊さとりを得ると也、方等經の中に有と

ハ此事なり〔哢〕阿含經の四諦縁生の法門ハ、またく如來の本意ならぬを、所化の機縁いやしくて、誠ごと修行して、法界空の理をばしらずして、たゞ心あればこそ身われとおもひて、但空偏眞の理に落いてたる故に佛又手をかへて、衆生を引導し給故に、方等經の中に四教をならべて、色〻に説ます、これ淨名經等にて侍り、此時むかしのさとりにもつかず、今のさとりをも得ず、所化の衆生たゞどうせんとしたる心歟、一會の衆、有空錯乱して迦葉泣て三千にふるひ

覺す成けり、〔細〕内大臣の夢也　夢み給ひて、いとよくあハする物めして合せ給けるゝ、もし年比御心ゝもえられ給ハぬ御子を、人の物になして

うらなひ人の詞也　おはんこ　内府の玉ふ也

聞召出る事やときこえたりけれど、女ごの人の子に成とハをさ

草子地也

をさなし、いかなる事にかあらんなど、このごろぞおぼしの給ふべかめる

善吉怙然として手に一鉢をなく、是によりふかく聡小墓大の機い直に圓にこえ、或い別にすゝみ、或い通にかなひ又い三識にとゞまる、されど、四教並習の教ともいひ、又彈阿の教ともいふ也

いひもてゆけど〔細〕塵〻法〻一色一香しかしながら純一實相にして、別の法なきなり〔晩〕般若調汰の心歟、かの阿含に折して碎空碎破の空理に沈み、方等にして有空錯乱せしを、今華竟皆空と説て、彼等の機をゆりさろへて、有空一念のさとりをわたへ給ふ是をいひもてゆけどひとつむねといへる歟、又般若にかきらず万法一如の心かと云〻

はだいとはんなうと〔細〕人の善悪菩提と煩惱と也、悪皆天台の法文を持て書り、紫式部い天台宗の許可迄を受て宗旨をきわめたり〔晩〕法花經の内證あらわれて見れど塵〻法〻一色一香しかしながら純一實相にしてさらに別の法なし、天際日のぼり月くだり、蓮葉い丸く松葉ハほそくして是離かなせるこゝろぞや、たゞ天物いハずしてをのづから四時のをこなハれたる道ばかり也、如レ此のすがたをはゞかるこもなく説故に、よくいへばといふなるべし、眞空と云心也、四十餘年ハ眞空ならずと見えたるか、はだいと煩惱とのへだゝりなきこと、龍女が無垢世界の成道にて聞えたり、毒龍の角をすて鮮をかへたるにもわらず、たゞそのまゝの成道也彼意未開會の時ハしばし煩惱菩提を二所にたてゝ、生死涅槃の二路にへだて、或は方便眞實を相待し、爾前爾後をかたく分ち、今法花開會の前にハ、此妙彼妙俄無殊にして、全く爾前爾後とたてざる也三毒三身無自性なれど三悪四趣則此躰身土煩惱菩提本不生なれば生死涅槃又空花の開落也、是しでし法花得益の一機の始終也、つら〻〻其まゝをふみ見れば、四十余年の勞功も是にあらず非にあらず、又いづれか虚いづれか實、何の方便を換して始て眞實にとゞまらん、凡一代の御法色〻機〻なるハ、たゞ根機の聞うると聞えざるとによるべし

螢終

明治廿三年十一月十一日印刷
仝　年十一月十二日出版
仝　年十二月　再版

大阪市東區北久太郎町四丁目百二十四番屋敷
圖書出版會社名代人
發行者　梅原忠藏

京都市上京區小川通下立賣西大路町八番戸
增註訂正者　猪熊夏樹

大阪市東區德井町二丁目六十八番屋敷
前野活版所分店
印刷者　前野茂久次

大阪市東區北久太郎町二丁目百廿四番屋敷
發行所　圖書出版會社

版權所有
版權登録

圖書出版會社藏版甲部賣捌所

大阪市東區備後町四丁目　梅原龜七
同　東區備後町四丁目　吉岡平助
同　京區安土町四丁目　積善館
同　東區北久太郎町四丁目　岡本仙助
同　東區北久寶寺町四丁目　濱本伊三郎
同　南區心齋橋北詰　中村芳松
同　東區淡路町三丁目　金川善兵衛

明治廿三年十二月二十日印刷
仝　年十二月二十一日第一版

版權所有

阪府圖書館藏

發行者　大阪市東區北久太郎町四丁目百二十四番屋敷
圖書出版會社名代人　梅原忠藏
增註訂正者　京都市上京區小川通下立賣四大路町八番戸　猪熊夏樹
印刷者　大阪市東區德井町二丁目六十八番屋敷
前野活版所分店　前野茂久次
發行所　大阪市東區北久太郎町四丁目百廿四番屋敷
圖書出版會社

圖書出版會社藏版甲部賣捌所

大阪市東區備後町四丁目　梅原龜七
同　東區備後町四丁目　吉岡平助
同　東區安土町四丁目　積善館
同　東區北久太郎町四丁目　岡本仙助
同　東區北久寶寺町四丁目　濱本伊三郎
同　南區心齋橋北詰　中村芳松
同　東區淡路町三丁目　金川善兵衛

訂正増註

源氏物語湖月抄發兌規定

訂正増註

源氏物語湖月抄

全部八卷紙數（一卷紙數四百廿頁內外）三千三百頁餘

明治廿三年十月ヨリ毎月二回發兌シ向四箇月ヲ以テ全部完了ス

正價（壹冊　金三拾錢　○四冊前金壹圓八錢　八冊前金貳圓八錢　○郵稅壹冊金八錢宛　御注文ハ一切前金ヲ要ス●郵券代用ハ壹割增）

本書總目次

既ニ發兌

首卷（發端。系圖。年立。表白。）

既ニ發兌

第壹篇

（桐壺。若紫。）帚木。末摘花。空蟬。夕顔。

既ニ發兌

第貳篇

（紅葉賀。須磨。）花宴。明石。葵。澪標。賢木。花散里。

既ニ發兌

第三篇

（蓬生。乙女。）關屋。玉鬘。絵合。初音。松風。胡蝶。薄雲。螢。

既ニ發兌

第四篇

（常夏。眞木柱。）篝火。梅枝。野分。藤裏葉。行幸。若菜上。藤袴。

明治廿四年一月發兌

第五篇

（若菜下。御法。）柏木。幻。横笛。附雲隱説。鈴虫。夕霧。

同

第六篇

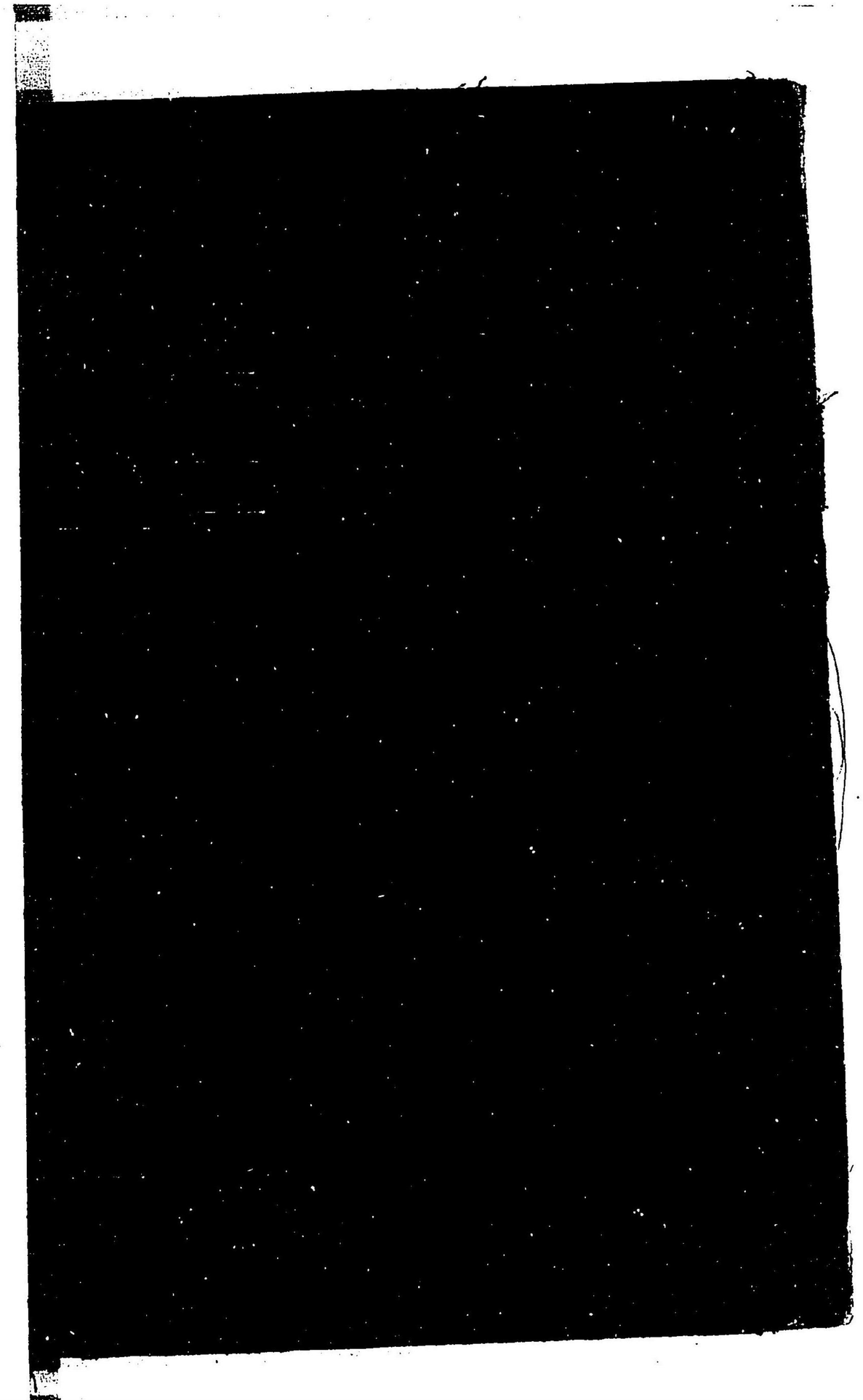
（匂宮。總角。）紅梅。早蕨。竹川。橋姫。椎本。

同　二月初旬發兌

第七篇

（寄生。夢浮橋。）東屋。浮舟。蜻蛉。手習。

31
37



088973-003-2

31-37

源氏物語湖月抄

北村　季吟／著

M23-24

DBL-0092